

図書だより

〈第12号〉

昭和60年1月31日
呉工業高等専門学校
図書委員会



目 次

1. 「暗夜行路」(志賀直哉)	1 M	早稲田健一	2
2. 「ムツゴロウの博物志」(畑正憲)	1 E	広永 健一	2
3. 「阿Q正伝」(魯迅)	1 C	新田 一舟	3
4. 「ほらふき男爵の冒険」(G. A. ビュルガー)	1 A	中本 博之	4
5. 「狭き門」(A. ジッド)	2 M	藤本 善久	5
6. 「シュミレーションの発想」(中西俊男)	2 E	清水 由晴	6
7. 「原子力発電」(武谷三男)	2 C	秋山 祐一	7
8. 「ソクラテスの弁明」(プラトーン)	2 A	栂山 健二	8
9. 「平家物語」	3 C	木村 美保	9
10. 推薦文	4 E	加茂 靖彦	10
11. 「痴人の愛」(谷崎潤一郎)	5 A	田坂 久美	11
12. “ほん”について思う	E16期	岡 真司	12
13. 編集後記			12
14. 新着図書案内			13

「暗夜行路」

(志賀直哉)

1 M 早稲田 健 一

この作品の結末は、非常にすばらしいと思った。妻の直子との仲がうまくいかず、別居するかわりに大山へ旅行に行った謙作だったが、旅先で重い病気にかかってしまった。そこへかけつけた直子が、謙作の姿を見て、「助かるにしろ、助からぬにしろ、とにかく自分はこの人を離れず、何所までもこの人に随って行くのだ。」と思い続けた。そこで小説は終わっている。なかなか感動的な結末だと思った。その後のことについて、作者は、謙作が助かるのかという質問に対して、どちらでもよいと答えたいが、僕がもし、この続きを書けば、やはり謙作は元通り、元気になって、今度は、直子と楽しい生活を続けていくということを書きたい。そして、もうこのような旅行に出ることのないようにしたい。

もう一つ感動した場面という、謙作と直子との間に、初めてできた子どもが生まれてすぐ丹毒にかかってしまうところ。その丹毒の痛みで子どもが、「眉間に太い皺を作って、小さい唇を震わしながら『ふぎゃあふぎゃあ』と云うように泣く」というところやその後の、「赤児の声は段々に暖れて来た。到頭仕舞いに顔ばかり泣いていて、声は出なくなった。」というところなど、その様子を想像すると、もうたまらなく、自分でもなんとかしてこの子を助けてあげたいと思ってきて、読んでいて、涙が出てきそうな場面だった。十中八九は、駄目だと言われた手術にも必死で堪えたが、傷口が背中全体ぐらいの大きくなって、仕舞には、背骨が見えるくらいになってしまい、発病後、ひと月で到頭死んでしまった。本当にこの子は、苦しむために生まれてきたようなもので、かわいそうだった。

話は変わって、小林秀雄、河上徹太郎両氏は「暗夜行路」を恋愛小説だと言ったそうだが、僕もなんとなくそう思う。謙作をはじめ、登喜子という芸者に一目惚したが、まもなく失望してしまい、次に愛子という娘に結婚を申し込んだが、仲に立つ男の不誠意やその他の原因で失敗してしまい、結局は直子と結婚した。作者は恋愛小説を書くつもりはなかったと言っ

いが、僕はやはり恋愛小説だと思う。

最後に、謙作は祖父と母との間にできた子だった。そのことを兄から聞かされた時の、失望と落胆は大きかっただろう。しかし、それを克服して、生きていったことは、すばらしいと思った。この小説の題、「暗夜行路」(闇夜の道を行く)は、この謙作の人生によってつけられたような気がする。この主人公謙作のモデルは作者自身というのもおもしろい。



「ムツゴロウの博物志」

(畑 正憲)

1 E 広 永 健 一

僕は、まずこの本を読み終えて^{おも}楽しかったなあとも最初に思った。

その理由は、著者が何かする時に、考えつくアイデアが楽しいのです。

例えば、約20メートルのアナコンダが馬を絞上げて頭からのみはじめていたという話を聞き、ガラスのカプセルを作り、その中に著者が入り、大蛇にのまれてその体の中を撮影して映画にするという、ちょっと普通では考えられないことを思いつくし、また、ヘビにのまれるための方法も生きた馬の中にカプセルを入れ、のみこんでもらうことなどどっぴょうしもないことを考えつくのです。

ほかにもいろいろあります。

モース先生がつくらせた婦人専用便所の中に入りた

いと思ひだし、アルコールを注射器に入れてハエというハエを皆殺しにし、ハエがいなくなったのでモースの婦人便所に踏みこんだことや、カエルの調教を思いついたり、はたけでアカガエルの交尾を観察していて、ゴミを捨てに来たと間違えられたり、楽しい話がたくさん載っています。

この本にも難しく僕が理解しにくいところもあったが、全体的に楽しく読めた。

話は変わるが僕も小学生の頃、著者と少し違うけど、夜中によく虫の集まるある幼稚園に虫を捕りに行き、泥棒と間違えられたことがあります。もうあれから、あまり虫を捕りに行かなくなりました。

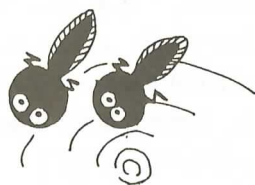
だから、著者がゴミ捨てに来た者と間違えられたところを読んだ時、僕は、小学生の頃のことを、思い出して笑ってしまいました。

それに、カエルが放卵するのを夜どおし待っているとは、普通の人から見れば間違いぎたである。また、ウシガエルをつかまえるために夜中まで待って、その上洋服のまま沼の中に入ったりするなど。こういう所から、著者は、自分が一度何々したいと思うと、夜中までかかっても、自分が思っていることが満たされないつまらない人だと思う。

また、自分もっている動物に対する疑問を解くためには、洋服のままでも沼に入るなど、私達には真似ができないことも平気のできるのである。僕も、動物が好きで、犬一匹と猫二匹を飼っていますが、著者のようにはできない。こういうことは、生物がとても好きでないとできないことだと思う。

そして、著者を取り巻く人たちも著者に負けないくらい生物が好きで、個性が強い人だと思えます。そして、この人たちも、とっぴょうしのないことを考え、実行するのです。

この本には、こんなことがユーモアに書かれています。こういう点が僕は楽しかったと思います。まだこの「ムツゴロウの博物志」には続編、続々編があるので、これも読んでみたいと思っています。



「阿Q正伝」

(魯迅)

1 C 新田一舟

僕はこの本を読んでみて、このすごく短い作品の中で、阿Qという、自分の察するところ馬鹿としか言いようのない主人公を通して、昔の中国、しかも農村にある貧富の差、それによる身分差別、人をさげすむ様子などをよく表していると思います。

阿Qという男は、一定の職業がなく日雇いの労働者で、人々は作物の刈りとりのおいしい時などしか阿Qのことを思い出さなかった。そして時にその土地の富豪の気にかかることを口に出し、なぐられることもたびたびあった。そしてある日、富豪の家へ雇われて行ったのだが、その家で不祥事をおこしたということでその家を出され、その家への謝罪とのことで持っているものほとんどをとりあげられてしまった。ここから先が僕がおもしろいと思うところで、阿Qは丸裸同様になり、雇ってくれるところをさがすのだが、富豪の家での不祥事が知れわたったせいか、誰も雇ってくれないのだった。こういうところで当時の富豪の権力、人々の冷たさを表しているように感じられる。それから阿Qがその土地を離れてしばらくしてまた帰ってきた。そのときの阿Qはその土地を離れた時とちがって、金持ちというほどではないが、かなりの金をかせいで帰って来た。するとどうだろう。今までの人々の態度が全く変って、誰もが声をかけるようになった。商売をしても、とぶように品物が売れた。人々がいかに金持を丁重にあつかい、貧乏人をさげすむか、つまりいかに現金かがわかる。しかし景気のいい阿Qだったが、やがてその土地の人々の間に阿Qの売っている品物は盗品だといううわさが流れた。しかもちょうどその時革命がおこり、革命軍がこの土地にも入って来た。しかしその中にも悪者がいて革命に便乗して悪事をはたらいているのだ。そしてある晩富豪の家が襲われた。この事件に関係のない阿Qが革命軍のまねをしていてつかまった。法廷では阿Qが無実を発言することなく、役人が阿Qの刑を決めてしまった。阿Qは銃殺された。このことで役人には、金持ちの富豪とは親しくつきあい、事件があればまじめにとりくむが、

貧乏人の日雇などには普段何もしてやらず、ひとたび何かあれば、その人が無実だろうが何だろうと処分してしまってもいいだろうという考え方があったのだろうと思う。

阿Qという男は盗みもやったようだが、純粹で馬鹿な人物だったのだろう。今も昔もそうだろうが、このような人はそんなばかりしているのだろう。だからこの本はとても読みがいがあった。



「ほらふき男爵の冒険」

(G. A. ビュルガー)

1 A 中本博之

この書物の正式名称は、ドイツ語で「ミュンヒハウゼン男爵の水陸におけるおどろくべき旅行と、出征と、ゆかいな冒険男爵が宴会の席で友達仲間について語って聞かせたまま」という、1786年、ゴットフリード＝A＝ビュルガーの作である。

この書物の主人公であるミュンヒハウゼン男爵は、題名の通り奇想天外で自由自在な旅行——の話をしている。「話」なのだから内容が全て事実だとは限らない。まるっきり嘘かもしれない。しかしその嘘も人からシラケた目で見られるようなものではなく、人を話の中へ引きずりこんでしまうという実に「見事」なものである。

僕の小さい頃はよくこの書物に笑わされたものだ。今もそうだが……。話の中で、ミュンヒハウゼン男爵がトルコ遠征に行った時の事が書いてある。自分の乗っている馬に休息をとらせるために水を飲ませた。しかし、いっこうに飲み終わる様子もない。どうしたものかと原因を調べてみると……「馬の腰とお尻がすっぽり切りとられたようにすっかりなくなっている。」のである。馬が飲み続けるわけだ。少しのたしにもなっていないからである。で、後ろ半分はといえば……「後ろ半分は牧場において、早くもそこにいる馬どもと友達になって遊んでいた。」のだ。全く非現実的な事だが、それがかえってユーモアに聞こえる。あげくの果ては、それが真実とさえ思わせる。小さい頃、(馬は半分づつでも生きられるのか。)と、信じこんだ事もある。

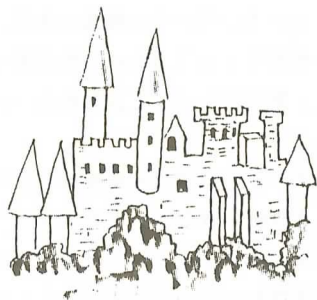
男爵がヨーロッパ旅行に出た時の事が話の中にある。そこで彼は全く恐るべき(?)人間離れした人間に出くわしたのだ。両足に各20Kgのおもりをつけて、700km離れた所からずっと高速で走っているという小男。草の伸びる音までも聞こえるという、相当な聴力を持っている男。1000km先のすずめ一羽さえも撃ち落としてしまう、圧倒的な視力と射撃力を持っている男。1.5kmの森を自力だけで引き倒してしまうという怪力男。鼻息で嵐が起こせるというとても肺活量の多い男。

この5人は、皆、男爵の家来となり、共に旅していく事になった。

ここでちょっと、いくら男爵が「ほらふき男爵」と呼ばれているとはいえ、この話は行き過ぎである。だいたい、時速1400kmで走る人間や、嵐ほどの風を起こせる肺活量を持つ者が絶対にいるわけがない。思い浮かべるといっても至難の技である。僕の表現が下手だから、読み手がこれらの人物を想像することはもつと難しいと思う。それだけばかげた話なのである。が、しかし……。

こんな話があっても悪くはないと思う。いや、こんな人間がいてもおかしくはないという気さえ起こってくる。今の世の中があれだけ乱れているんだ。男爵側から見れば、こっちの方がばかげているとしか思えないと思うだろう。それに比べればこの5人の男達はただのユーモアにしか過ぎない。男爵が大げさに話し過ぎただけだ。読みが浅かったためにばかげた話ととってしまったが、深く読んでみると、下手な現代漫才よりも味があるという事がわかってくる。

今の世界は乱れ、暗く沈んでいる。その世界へ舞い降りるべき救世主達の一つがこの「ほらふき男爵の冒険」だと思う。この書物によって人々の心が豊かになり、世界平和へとつながればこれこそ本望である。ビュルガーは先の事も見すえてこの作品を作ったのかもしれない。「ほらふき男爵」もそうであるが、この作者のビュルガーも恐るべき人物だと僕は思う。僕はこの「恐るべき」人物達にこれからも大いに楽しませてもらうつもりだ。



「狭き門」

(A.ジッド)

2M 藤本善久

この作品の主題は、小さなチャペルで、ヴォーティエ牧師が取り上げたキリストの言葉であろうと思う。それはこうである。

「力を尽して狭き門より入れ。滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者おおし。生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見いだす者すくなし。」

この話を聞いたジェロームはこう考えた。

「之より入る者おおし。」この者というのは、笑いざめき、浮かれたようすで行列をつくって歩いてゆく多くの着飾った人たちのことだとジェロームは思ったわけである。

この場面を現代で考えるとどうだろうか。今の若者は、(自分も例外ではないが)すべて、この大きな門に入る者だと思う。浮かれて、親をあてにして遊びまわり、いつまでたっても自立できない。今の若者でジェロームのように、「自分はそこから骨を折ってはいってゆくのだ。それは非常な苦しみではあるが、しかしそこには、何か天の祝福の前味といったようなものが見いだされるのだというふうに感じていた。」というように感じるものがあるだろうか。おそろくないと思う。

それでは、日本の未来はどうなるのか、少し心配に思う。

これがこの作品のメインであると、僕は、僕なりに考えた。

そして、もう一ヶ所考えてみたところがある。それはジェロームとアリサの会話の中でジェロームが「僕たちもそろそろ幸福に…。」と言うと、アリサが「でも、私たちは幸福になるために生まれてきたのではないんですわ。」と言う。ジェロームは「では、魂は、幸福以外に何を望むというんだろう。」それに対してアリサは「聖らかき…」と答えた。

聖らかき、アリサは、なぜそう答えたのだろうか。

それは、アリサは、人間としての幸福を求めず、神を重視し、神への道に幸福を求めたと一部に書いてある。

しかし、ここまでする必要があったのであろうか。少し疑問に思う。人間として生まれて来て、人間としての幸福を求めればいいのではないかと思う。

狭き門に入るというのが、神の道に幸福を求めることなら、僕は広い門に入ってもかまわないと思う。

それは僕が、笑いさざめき、浮かれた人間だと言うことかもしれない。

この作品を読んで、このまったく逆の二つの感想をもった。

この作品は、僕にどうもよくわからないことが多かった。



「シュミレーションの発想」

(中西俊男)

2 E 清水由晴

まず私がこの本を手にしたとき、「シュミレーションとはいったいどういう意味だろうか?」と思い、早速、国語辞典を引いてみたが、「ない!」のであった。

そこで本を読み進めているうちに、このシュミレーションの意味を解説している項にぶつかった。

そこでは、「シュミレーション (Simulation) という言葉は、もともとラテン語の (Simulo) (まねる、ふりをする) から出た古い言葉である。」とあった。つまり、この現実の世界での事柄、変化などを、現実の世界に似せたモデルを作り、その中で、事柄、変化などを観察するということである。

このようなことは、日常、我々の頭の中でもいろいろ思考されている。

例えば、ある目的地へ行くまでの時間、費用などを頭の中で考えたり、将来の自分を想像したりするのもシュミレーションの一種であると考えられる。

ただし、この本では主にコンピュータを用いたシュミレーションについて解説してあるので、こちらの方でも説明してみる。

コンピュータでのシュミレーションにはモデルを動かすための時間があり、その時間のことを、シュミレーション時間 (又はシュミレーションクロック) という。

これと共に、現実の時間のことを、実時間 (real time) という。

また、モデルにもいろいろな種類がある。

まずは、物理的モデルと言われる形のあるハードウェアモデルと、数学的モデルと言われるソフトウェアモデルがある。

ここからのモデルの分別は大変複雑でわかりにくく、私にはほとんど理解できなかったので説明できない。

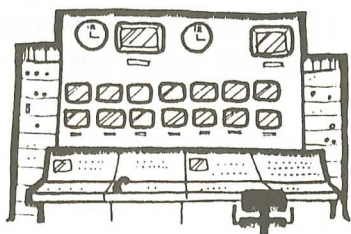
次に、このシュミレーションの歴史について見てみると、今から半世紀ぐらい前に開発されたアナログコンピュータがその始まりである。

それから、デジタルコンピュータが開発され、次第に、複雑なシュミレーションを行うことも可能とな

った。

現在では、気象の変化、道路の交通状態、ビルの耐災害性、人口の増加状態などについてもシュミレーションできるようになり、現在の人間の生活には欠かせないものとなっているように思う。

正しい使い方をすれば、シュミレーションは大変便利なものだが、誤った使い方をすれば恐い結果となるのではないかと思う。



「原子力発電」

(武谷三男)

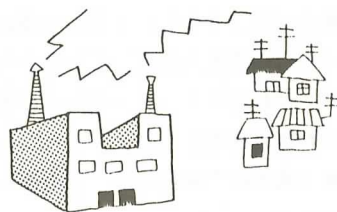
2C 秋山 祐一

まず、原子力発電とはどんなものかという、簡単にいえば、現在の方式では、高濃度のウラン235など(プルトニウム239やトリウム232でも核分裂する)に中性子をあてると原子番号の少し下がった物質に原子核が分裂し、そのさいに発生する莫大(同じ重さの物質に比べて)なエネルギーで水などを使ってタービンで発電するというものであるが、その中心をなす原子核分裂を最初に使われたのが兵器としてであった。いうまでもなく、原子爆弾であった。これはその当時(今でもそうであるが、水素爆弾というものが一番強力であろう)では最も恐ろしいものだった。結局、この原子力発電とは兵器によって生まれた技術なのである。

ところで、原子力発電でのコストであるが、調査方

法などによりかなり異なるみたいで、安いのもあれば高いのもあるといったふうに(これは僕が週刊誌などを見て思ったことです)いろいろあったが、僕自身の意見としては、いろいろな物の管理や4年ごとに変えなくてはいけないウラン239や、放射能が付いた物の処理などに使われる金もかなりかかるようで、石油よりは少し高いところだろうと思う。それに付け加えて原子力発電では、事故が発生した場合、火力発電と比べて格段と危ないのである。そしてそれが世に及ぼす影響も小さなものでないはずである。ただ、事故が生じる原因として機械を整備する人間の側の方に問題があると思う。それは今まで事故を生じた直接の原因がバルブが正常に作動しなかったり、放射能を持った水が漏れてみたりといったふうだからである。しかし、構造的にも原因はあることもあるので、そのへんは次に同型のを作るときには正しておいてほしいものだ。

全体の感想としては、原子力発電は多くの制御機構を持った最先端技術のかたまりだと思った。それだけにデリケートなところも数多くあり、そのへんのところがとてもおもしろかった。僕自身、エレクトリックなことは好きなので、特に制御のところはおもしろかったと思う。ところで僕は、今まで原子力発電所は制御がきかず、どんどん核分裂が起こると原爆と同じに爆発するなと思っていたが、それはまちがいとわかった。これは知っているつもりでも、ほんとうは知っていない。——これはまるでソクラテスの「無知の知」ではないかと、はずかしい今このごろです。



「ソクラテスの弁明」

(プラトーン)

2A 梶山健二

倫理社会の授業でソクラテスという人物の考え方を教わった。ソクラテスという名は知っていたが、彼が何をしたのは全く知っていなかった。そして授業で彼の行動を学び、彼の生き方、考え方に興味を持った。そしてもっとソクラテスについて知りたいと思った。それでプラトン著の「ソクラテスの弁明」を読むことにした。この作品を読むもう一つの理由として、倫理社会の宿題と重なったこともないこともない。

「ソクラテスの弁明」の中でソクラテスとプラトンが我々に伝えたかったことの一つに自分の無知を知れ“無知の知”があったようだ。ソクラテスが裁判所に訴えられた真の理由は人々に無知の知を説いたためだそうだ。簡単にいえばソクラテスは人々に、あなたは無知だ、と言って歩いたのだろう。人々が怒るのも無理はないと思う。けれどよく考えてみると、実際我々はあまりにも無知すぎる。彼が言っているように我々は善、美とか正義などの言葉をよく使う。それらの意味も知っている自分では思っている。しかしそれらの意味を深く考えると、どんな性質のものなのか全然わからない。実際我々は本当に無知なのだろう。ソクラテスはそこに気づき我々に無知を告げたのだろう。

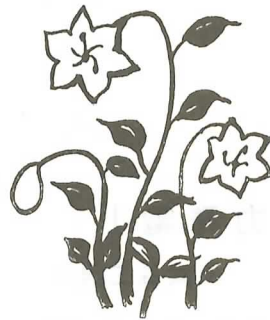
この頃の裁判では被告は自分の子供などを連れて来て、陪審員に涙を見せて刑を軽くしてもらおうとしたそうだ。しかしソクラテスはしなかった。それどころか彼は家族を捨てて、自分の命を捨ててまでも自分の意思を貫こうとした。彼は裁判で有罪と判決されても無罪を訴え、結局死刑になってしまった。彼は生きること以上に自分の考えを貫くことを重要と考えていたようだ。我々は何より死というものを恐れている。普通の人なら自分の考えを曲げてでも死からだけは逃れようとする。けれどソクラテスは自ら迎賓館での食事を求刑してわざと死刑になるようにしたのだろう。彼は自らの死で我々に“知行合一”の精神を伝えようとしたのであろう。

僕はこの作品を読んで、何故ソクラテスは自分の命をかけてまで“無知の知”、“知行合一”を伝えよう

としたのだろうと考えた。

「大切にしなければならないのは、ただ生きるということではなくて、善く生きるということなのだといふのだ。」

ソクラテスが「クリトン」の中で言っている一節だ。無知に気づき、真実を求めて人々に善美なことがらについて尋ねたのも、命を捨てて考えを貫いたのも、ソクラテスにとっては善く生きるための手段だったのでないだろうか。僕には、どのように生きることが善く生きるということになるのかはまだはっきりとはわからない。ソクラテスのようにはいかないだろうが、できることなら僕も善く生きたいと思っている。



「平家物語」

3 C 木村美保

「平家物語」の冒頭に述べられている、諸行無常、盛者必衰の理といった仏教思想は、大変有名である。しかし、そのような宗教的側面だけが、人々をこれほど長い間、引きつけておけるだろうか。

日本人は、元来、敗者、滅びゆくものに対して、心を引かれ、美しさを感じるという。この「平家物語」には、その特徴がよく表われていると思った。平家が勢力をもっていたころは、人民の反感も強く、私が読んでも横暴だなあと感じている。しかし、平家が没落しはじめるころからは、いつのまにか、平家の武者たちに魅力を感じはじめていた。源氏の武将たちの多くは、武骨一点張りである。しかし、平家には、風雅を解する趣味人が多い。例えば、戦場で毎夜、笛を吹く敦盛もそうである。敦盛は、顔に薄化粧をして、お齒黒をつけた、16、7の美少年として登場する。初めは、なんてきもちの悪い少年だろうと思ったが、これが、当時の公家にしては、シャレしていたのだろうし、当然のことだったのである。彼こそ、いかにも、お公家様という感じである。だが、彼は、敵にうしろを見せて、逃げることをしない。そして、敵にうたれてしまうのである。よろいの中から、笛が出て来て、それが毎夜、きこえてきた笛であることがわかる。武芸にぬきんでは確かに、武士としては、望ましいことであろう。しかし、このような、戦いの中にあっても、優雅さを忘れない人間の方に、私は強く引かれる。

また、薩摩守忠度は、都落ちの途中、藤原俊成の所へ立ち寄り、和歌集が編まれる際に自分の歌を入れてくれるようにと、巻物をたくす。今から、戦争へ向かおうとする人の最後の願いが、この、歌に関することだったのである。しかし、後日、一たん戦争に出れば、勇敢に戦いぬいた。死後、鎧に歌を書きつけた紙が見つかる。そして、その武者が、忠度とわかった時、敵も味方もその死を惜しんで涙を流す。

ここに、もう一つの、この作品の特色が出ている。ただ、みな勝てばよいというのではない。いかに美しく、勇ましく、また、優雅であるかが重んじられてい

る。それを、強調するかのように、源氏の兵士たちの描かれ方は、全く対照的である。義仲にしても、義経にしても「平家物語」の中では、ひたすら、戦いのことに専念し、しばしばそれを、忘れさせるのは、那須与一くらいだろう。

平家の人々は、公家社会と、武家社会のちょうど中間に位置しているように思える。もともとが武士であるから、公家たちのように、あわてふためいて逃げるわけにはいかない。かといって、源氏のように、戦いに徹するほどの強さは、長い宮廷生活で衰えてしまった。その中途半端さが、平氏の滅亡を早めたのではないだろうか。だが、そのように、一見弱そうでありながら、かえってその中間的性格が人々を引きつけてきたのではないだろうか。武士には珍しく、平家の武者は、公達ぶりを発揮する。それでありながら、自らの命をなげうって戦う。そして「宇治川の先陣争いに見られるように」自らの力を信じて行動するその態度は、武士そのものである。優雅な情趣を愛するという面と、勇壮な美との両面をもった平家武士たち。平氏の悪政になやまされたとは言え、そのような風流な武人たちに引かれると同時に、彼らが滅びて行かざるを得なかった時代の流れというものを、痛切に感じただろう。そして、勝った源氏の武士たちは、終始、武骨な田舎者と言われ、そうした点からも、洗練された都会的の武士であった平氏に、あこがれをいだいたのではないだろうか。

普通、敗者の物語は消滅して行くものである。だが、この平家物語が今日まで人々に愛され、語りつがれてきたのは、以上のような理由からではないだろうか。

私たちも、戦争におもむくことはないが、社会に出るならば、様々な荒波にもまれ、つい、出世することや、富を得ることに没頭しがちである。そんな時でも、平家の武士のように、笛と和歌とはいかないが、美しいものを愛し、自分をみがくことを忘れないでいたい。それでこそ、本当に人間らしい人間と言えるのではないだろうか。



推薦文

4 E 加 茂 靖 彦

そこの、あなた。そう、“こんな退屈な授業を聴いているよりは、いっそ眠ってしまおう”なんて考えているあなた。ちょっとまって下さい。せっかくの大切な授業時間だから、眠ってしまうなんてもったいないことです。そうです、こんな時にこそ、本を読むのです。本を読む、という事は、退屈で、眠たい授業時間を有意義に過ごすための、最もよい方法の一つです。

では、一体、どんな本を読んでみようか？マンガでもいい、雑誌でもいい、けれども、たまには、文学的なものを読んでやろう、等という大胆、かつ無謀な考えをもってみてはいかががでしょう。

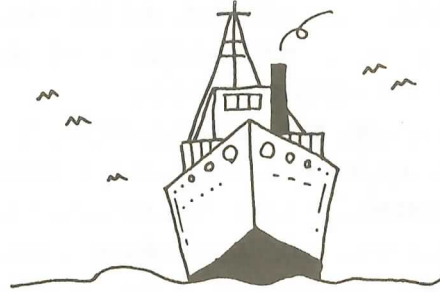
そうと決まったなら、日本文学では物足りない。どうせなら、外国の、しかも難しそうで、長ーいやつ。

そこで、今回僕の紹介するのは、僕の最も新しく読んだ本です。

なぜ、僕がその本を買ったかという、実は、僕は、文学に目覚めたのでもなければ、先刻言ったような、大それた考えを思いついたのでもありません。いつものように本屋に入って何かおもしろそうな本はないかなあ、と本棚を眺めていると、ふいに目に入ってきたのは、その本の題名。「白鯨(MOBY-DICK)」モービー・ディック。今は亡き名ドラマー、ジョン・オーナムをイメージさせるツェッペリンの曲(わからない人には、全く、すみません)。その曲の題名が、この小説からとったものだという事は、その小説のストーリーの大まかなところは知っていたけれど、実際、目前にその本を見ると、思わず感動せずにはいられません。買ってしまおう、それを取ってレジに向かおう。

僕がその本を買った原因はそんなもので(そんなきっかけで本を読む、なんてこともいいじゃないですか)。さて、全体、いつになったら本の紹介をするんだい、と言っているあなたに、今からします。

この本の著者、メルヴィルは、スコットランドとアイルランドの血をひく父と、オランダ人の母との間に、1819年、ニューヨークで生まれます。そして彼は、



この本の中で語り手となる男、イシュメールという若者——陸での生活にすっかり倦み果ててしまい、海に救いを求めて捕鯨船ピークォド号に乗り組む若者——として、登場します。そうして、次はあらすじなのですが、知っている人も多いと思います。

風来坊イシュメールの乗り込んだ捕鯨船ピークォド号。この船の船長は名前をエイハブといい、彼はさきの航海の時にいくわした怪物抹香鯨“モービー・ディック”に片脚を食いちぎられてしまう。そしてピークォド号は2度捕鯨航海に出発する。そのキャプテン・ルームには、モービー・ディックを屠り去ることのみ、気違いじみた執念を燃やすエイハブをのせて…。

と、あらすじはこんなものなのですが、はたして、この本に書いてあるのはただ、これだけの物ではありません。この本には海が書かれています。又、人間というものについて、その友情や、愛情や。イシュメールはピークォド号に乗り込むために渡った島、ナンタケットの宿でクィークェグと言う南の島から来た食人族の銛打ちと親友になります。辺りの人がおどろくほどの。しかし彼らはそんな人々が何と言おうというふうに気に留めません。そして2人でピークォドに乗り

組みます。

そしてこの本は捕鯨について、当時の捕鯨や捕鯨船のことについて詳しく書いてあります。なぜならメルヴィルは実際に自身の体で体験したことなのですから。

今日でこそ、鯨は、人類の文明の急激な進歩の前に絶滅をも危ぶまれるような状態ですが、当時の人々の前に、鯨はいかに巨大で、怪ろしく、畏敬の念で見られていたことか！

またこの本は、鯨という動物によって人間を外側から観察し、それによって人間を外側から批判しているそうです。漱石の「吾輩は猫である」のように。モービィ・ディックの前に立つエイハブの姿に、何と人間はちっぽけで、弱くて、おろかしい生きものなんだろうという感じを持ちました。

次第に話が固くなって来ましたが、興味(と、暇と、お金)のある人は、買って読んでみて下さい。上、下2巻に分かれていて2つで九百円くらいでした。おそらく一と月くらいはもつんじゃないんでしょうか。

「痴人の愛」

(谷崎潤一郎)

5 A 田坂久美

愛に形があるとすれば、この小説に描かれている愛は実に難解で曲折していると思う。まさに盲目的の愛としか言えない。

主人公の「私」は「ナオミ」という女を愛している。

この「私」という人物は、会社でも「君子」と言われるほど模範的で真面目で、常識的な人物であった。

「ナオミ」は、一見、西洋人的な容姿を持つ、ウェイトレスだった。そんな「ナオミ」に、一目ぼれをした「私」は、「ナオミ」を自分の好み通りに成人させようとし、そのために、かなりのわがまを許しますが、次第に手に追えなくなり、それどころか、逆に、自分がふり回されてしまう。しかし、どうしても「ナオミ」から離れることができず、結局は「ナオミ」の言いなりになり、会社も、財産も手放し、親に対してまでもウソをつき、常識的であった人物が、だ落的な生活をするようになる。

ところが、そんな風に落ちぶれた「私」が最後に、「これを読んで、馬鹿々々しいと思う人は笑って下さい。教訓になると思う人は、いい見せしめにして下さい。私自身はナオミに惚れているのですから、どう思われても仕方ありません」と言うのだ。

この小説の話を、そのまま現実のものとするには、少し突びかもしれないが、しかし、こういう気持ちになることが、多かれ少なかれ、だれにでもあるのではないかと、私は思うのです。第三者の目から見れば、あきらかに常識を外れ、よせばいいのに……と思われるようなことが、当事者には見えないのです。どうしようもないこと、仕方のない心、というのは、だれの心にも存在すると思う。だから、どうすればいいのか、ということは、私にはわからない。しかし、そういう気持ちが存在する以上、考えざるを得ない問題だと思う。盲目的であっても愛は愛である。

愛の意味、心の葛藤、そのいう事について考えさせられた小説であった。



“ほん”について思う

E 16期 岡 真 司

私は入学して暫くは、全く本を読みませんでした。それが3年になってからなぜか本がおもしろくなって、主として図書室の本を濫読しはじめたのです。それも、皆がよく読むようなSFや推理小説、随筆等ではなく、現代文学小説といわれるものを中心に読みました。これらの小説は読みやすく、すぐおもしろいというものではないのですが、じっくりと読めばとてもおもしろく考えさせられるものも多かったです。この違いを、あえて例えてみるならば、3日間煮こんだシチューと、インスタントのカップスープの違いという感じです。人によって好みはあると思いますが本当の楽しさ、よさを知ってほしいと思います。そのためにも図書室の本を有効に利用してほしいと思います。

私が読んでよかったと思い、皆にも読んでほしいと思う本をいくつか述べさせていただきます。まず図書室の文庫本では、阿川弘之「雲の墓標」、遠藤周作「海と毒薬」、北杜夫「楡家の人びと」等、他にも多数ありますが、特に読んでほしい本としては、安部公房「他人の顔」があります。これは是非とも読みきってほしいと思います。難しい本だとは思いますが、それ以上の何かを感じさせてくれる本だと思えます。

今年度、図書室の文庫本コーナーの拡充が計られ、新潮文庫が一揃い入るそうなので、この機会をのがさずに、本に親しんでほしいと思います。

私が読んでよかった本としては

「キャッチ=22」 (ハヤカワNV)

「ファウスト」 ゲーテ

「リヤ王」 シェイクスピア

以上のようなものです。

「キャッチ=22」は第二次大戦時、欧州戦線での話、ゲーテとシェイクスピアは、評判通りで、やはりそれだけのことはあります。

「他人の顔」を含めて、上にあげた本は、どれも現代社会に時代背景を置き換えてみると、現代社会を鋭くえがっているとしか言いようのない本ばかりです。

まず、読んでほしいと思います。

早いうちに読んでほしい本としては、星新一「人民は弱し官吏は強し」と「若きウェルテルの悩み」等です。これらの本からとにかく本を読むことを始めてもらいたいと思います。

図書室に対して不満のある人は多いと思います。図書委員の先生等を通して、その意見をもっと出して下さい。皆がその気になれば改善される問題も多いのです。使いやすい図書室にするためにもがんばって下さい。

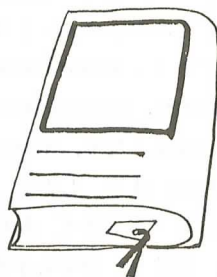


編集後記

第12号をお届けします。この度は学生の皆さんの読書感想文、読書論を掲載し、内容も日本文学、東洋文学、西洋文学、科学、哲学、古典等、バラエティーに富んでおり、どれも興味深く読んでいただけるものと思います。教官からの原稿が一つもないのは少し残念な気もしますが、次号に期待したいと思います。

なお、蛇足ながらBC木村さんの「平家物語」に登場する薩摩守忠度(たいらのただのり)は、彼の名(ただのり)にしゃれて、無賃乗車することを「薩摩守」ということでも有名であることを申し添えておきます。

(宇根記)



新着図書案内

> 0 総 記 <

コンピュータ・ウォーズ

(W. H. ダビッドソン)ダイヤモンド社

現代人のコンピュータ

コンピュータネットワーク 朝 倉

Cプログラミング (石田 晴久)岩 波

ブリタニカ国際年鑑 1984

歴訪世界の博物館 (斎藤 忠)六 興 出 版

朝日選書 朝日新聞社

235: 兵士の歌

236: 砕かれた神

237: 地震学事始

241: 忠臣蔵と四谷怪談

242: 新しい政治経済秩序を求めて

243: 大和魂と星条旗

244: 仮面・神話・物語

246: 現代史ベルリン

247: 私の文章修業

248: 民衆史の発見

249: 女の戦後史(1)

250: 差別・その根源を問う(上)

251: (下)

252: 教育はどこへ

253: 地球レポート

254: もうひとつの世界文学

255: 新・日本住宅物語

岩波クラシックス

45: 唐詩選(下)

49: 啄木歌集

50: 般若心経・金剛般若経

51: 王朝秀歌選

52: わらべうた

53: キリスト教伝説集

54: 歌よみに与ふる書

55: ベーコン随想集

56: 職業としての政治

57: 茶の本

58: 後世への最大遺物, デンマーク国の話

59: 吉田松陰

60: 権利のための闘争

岩波グラフィックス

19: 古代エジプトへの旅

20: 曼荼羅のみかた

22: 古寺建築入門

23: 陶磁の里〜高麗・李朝

24: 新富嶽百景

フォートラン演習120題 (大西 正和)日刊工業新聞社

情報工学レクチャーノート (市川 忠男) ク

パソコン・シミュレーション入門

(石川 宏)企画センター



> 1 哲 学 <

知識とはなにか (鈴木 茂)青木書店

生きがいの探求 (鈴木 広)九州大学出版会

現代の心理学 (濱田 哲郎)朝 倉

ヒューマンイズムの倫理 (式部 久)勁草書房

歎異抄と親鸞 (千輪 慧) ク

カントとシラー (小田 武)啓文社

知の発見-叡知 (広中 平裕)てらこや出版

自己を伸ばす (ベル・アーサー)創元社

> 2 歴史 <

ストーンヘンジの謎は解かれた
 (G. S. ホーキンス)新潮社

国史大辞典 4 吉川弘文館

広島県史 広島県

近世2
 年表
 索引
 総説

ガンディ〜非暴力の道
 (ジェラルド・ゴールド)平凡社

朝永振一郎博士・人とことば(加藤八千代)共立出版

森林の思考・砂漠の思考 (鈴木秀夫)日本放送出版協会

世界地理 朝倉

2: 東アジア

角川日本地名大辞典
 12: 千葉県
 14: 神奈川県

日本歴史地名大系 平凡社
 14: 神奈川県の地名

京の裏道 (松本章男)ク

シルクロード, ローマへの道 日本放送出版協会
 10: アジア最深处: ソビエト(2)

アトラス現代のソ連邦
 (J. C. デュードニ)原書房

日本の城事典 三省堂

各駅停車全国歴史散歩 河出書房新社

5: 宮城県
 29: 兵庫県
 30: 奈良県
 33: 島根県
 48: 沖縄県

> 3 社会科学 <

二十世紀のリーダーたち (岸 信介)サンケイ出版

現代政治・行政への手引 (橋本 哲一)勁草書房

平和は歩いてこない (法政平和大学)ク

全訂 法学事典 (末川 博)日本評論社

法律学全集 有斐閣

3: 憲法(1) 第3版
 4: 憲法(2) 新版

人口と社会問題 (中本 博通)南窓社

オフィスオートメーション入門 (中村 茂)オーム社

人間関係管理論 (富田 嘉郎)朝倉

日本統計年鑑第33回(昭和58年) 日本統計協会

反抗と自由 (エーリッヒ・フロム)紀伊國屋

災害の科学 (鳥海 動)森北出版

明治維新教育史 (井上 久雄)吉川弘文館

アイルランドの民話と伝説 (三宅 忠明)大修館

日本軍閥の興亡(上, 下) (松下 芳男)芙蓉書房

岩波ブックレット

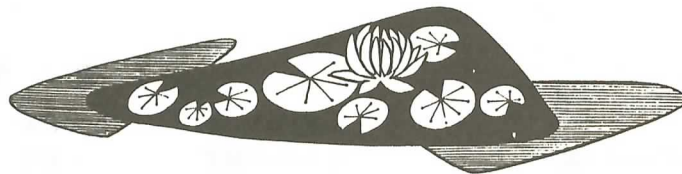
28: 食品添加物を考える<食べものと文明>
 29: 雇用の平等と女と男
 30: 軍事化される日本
 31: 私たちののぞむ教育改革
 32: 新PTA読本
 33: 死刑か無罪か〜えん罪を考える
 34: トマホークとは?

刑法の解説 一橋出版

暮らしの法律相談-200問・200答- 金園社

学校で教えてくれなかったSexの知識
 (荒川 和敬)高橋書店

愛は教えられるか
 -高校生の〔愛と性〕を生きる-
 (吉田和子)高校生文化研究会



> 4 自然科学 <

竹内均のベーシック・サイエンス

(竹内 均)教育社
初等情報処理講座 森北出版

5: 乱数の知識

左と右の世界 (原田 馨)朝 倉
科学者の眼 新版 (三宅 泰雄)三省 堂
情報処理のための数学 (赤 攝也)共 立 出 版 会
情報処理のための数学 (三重野博司)電 気 学 会
理工学のための応用数学1 (弥永 学)朝 倉
数学入門シリーズ 岩 波

1: 代数への出発

2: 微積分への道

3: 複素数の幾何学

4: 2次行列の世界

5: 順列・組合せと確率

6: 日常のなかの統計学

8: コンピュータ入門

教養の統計学 (深谷 浩)朝 倉
FORTRANの数値計算入門(金田 数正)内田老鶴圃新社
化学と物理がわかるBASICプログラミン
グ (間室 規)日刊工業新聞社
物理学選書 裳 華 房

17: 応用エレクトロニクス

流体力学の進歩乱流 (谷 一郎)丸 善
振動と波動 (寺沢 徳雄)岩 波
最新電磁気学 (松原 正則)昭 晃 堂
明日への化学 (赤堀 禎利)開 成 出 版 会
絵とき化学入門 (藤谷 正一)オ ー ム 社
ハンディブック化学 (山本 績) ク
化学の単位・命名・物性早わかり

(岡田 功) ク

初歩者のための化学入門 (荻野 典夫) ク
基礎化学 (吉岡甲子郎)裳 華 房
化学ハンドブック オ ー ム 社
歴史をたどる化学 (山本大二郎)東 京 教 学 社
初めて化学の理論を学ぶ人のために

(藤谷 正一)オ ー ム 社

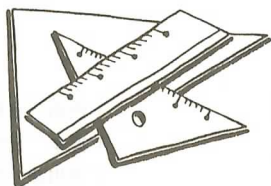
物質の構造(上, 下) (A. ギニエ)共 立 出 版 会
図説基本化学 物理化学編 (石倉 久之)丸 善
化学を楽しくする5分間 (日本化学会)京 都 化 学 同 人 会
化学分析のしかた・考え方 (吉弘 芳郎)オ ー ム 社
図説基本化学 有機化学編 (藤本大三郎)丸 善
日本の国土(上, 下) (小出 博)東 京 大 学 出 版 会
第四紀 (成瀬 洋)岩 波
原色牧野植物大図鑑 続編 (牧野富太郎)北 隆 館
岐路に立つ医療問題 (川上 武)勁 草 書 房
現代を病むころ (荻野 恒一)有 斐 閣



羞恥の構造 (内沼 幸雄)紀 伊 國 屋
栄養化学 (梶本 五郎)京 都 化 学 同 人 会
食品化学 (宮川金二郎) ク
物理学 One Point 共 立 出 版 会
25: 物理便利帖 (大槻 義彦)
化学 One Point ク
9: 化学ポテンシャル (君塚 英夫)
10: 液晶 (岩柳 茂夫)
物質の世界 (水島三一郎)講 談 社
ソロモンの指環(ローレンツ・コンラート)早 川 書 房

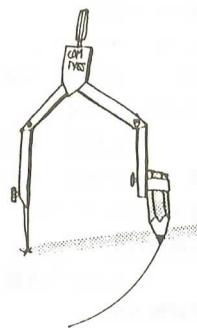
> 5 工 学 <

エネルギー科学叢書 共立出版
 1: エネルギー科学と技術開発
 3: エネルギーと社会
 電気・電子のための有限要素法入門 (加川 幸雄) オーム社
 パーソナルコンピュータによる有限要素法入門 (小貫 天) ク
 明快機械振動の基礎 (佃 勉) 東京電機大学出版局
 初等塑性力学 (竹山 壽夫) 丸 善
 材料力学入門演習 (中沢 一) 産業図書
 新選材料力学演習 (大久保 肇) 養賢堂
 材料力学演習500題 (沖島 喜八) 日刊工業新聞社
 未来を拓く先端材料 (島村 昭治) 工業調査会
 フィードバック制御 (島田 正) オーム社
 最新制御システムシリーズ 電気書院
 7: 電動機制御システム
 工業英語シリーズ 南雲堂
 1: 工業英語の正しい訳し方
 2: 工業英文説明書
 3: 工業英文作成のコツ
 4: テクニカル・イングリッシュ
 設計工学シリーズ 丸 善
 4: 生産性設計
 計画学講座 朝 倉
 6: 工場計画
 工場レイアウトの技術 (リチャード・ミュサー) 日本能率協会
 作業研究と作業管理 (川島 正治) ク



土木マイコンシリーズ 近代図書
 1: 土木技術者のためのマイコン入門
 2: マイコンによる1集土木実用プログラム入門
 5: マイコンによる3集土木実用プログラム入門
 6: マイコンによる4集土木実用プログラム入門
 土木へのアプローチ (榎木 亨) 技報堂
 土木技術者のためのパソコン活用入門 (岡 耕一) オーム社
 土工学大系 彰国社
 6: 連続体の力学(2)
 最新土工学シリーズ 森北出版
 13: 最新交通工学
 新体系土工学 技報堂
 14: 土质地質
 69: 空港
 図解土木講座 ク
 水理学の基礎 彰国社
 わかりやすい土木講座 彰国社
 6: 土質工学 新訂版 森北出版
 防災シリーズ 森北出版
 4: 橋梁の耐風・耐震
 図解土質・基礎用語集 (原田 静男) 東洋書店
 新稿土質工学 (松尾新一郎) 山海堂
 実際に役立つ橋りょう構造物の設計計算例 ク
 水の分析 第3版 京都化学同人
 都市美を求めて (橋岡 武) 鹿島出版会
 建築のための心理学 (大山 正) 彰国社
 建築デザイン心理学 (小林 重順) ク
 建築心理入門 (ク) ク
 建築への誘い (近江 栄) 朝 倉
 象徴としての建築 (川添 登) 筑 摩
 現代建築学 鹿島出版会
 建築材料・施工
 磯崎新+篠崎紀信建築行脚 六 耀 社
 12: ゆらめくアール・デコ
 SD選書 鹿島出版会
 185: プレシジョン(上)
 186: ク (下)
 187: オットー・ワーグナー
 188: 環境照明のデザイン
 189: ルイス・マンフォード
 190: 「いえ」と「まち」
 世界現代建築写真シリーズ 集 文 社
 12: 医療施設
 13: 教育施設
 DA建築図集 彰 国 社

低層集合住宅2
 建築のレンダリング (ロバートW. ギル) 彰 国 社
 図説自然エネルギー建築のデザイン
 (デビッド・ライト) ク
 インテリアデザインの実際 (狩野 雄一) 理 工 学 社
 機械のABC (池照 正一) オ ー ム 社
 機械工学SIマニュアル 日本機械学会
 標準機械工学講座 コ ロ ナ 社
 25: 原子力工学
 機械工学演習シリーズ 森 北 出 版
 1: 演習水力学
 機械工学基礎講座 朝 倉
 15: 応用弾性学
 機械工学解説と演習シリーズ コ ロ ナ 社
 1: 解説と演習原動機
 機械工学大系 ク
 13: 応用熱力学
 43: 鑄造工学
 機械振動学通論 第2版 朝 倉
 トライボロジー概論 (木村 好次) 養 賢 堂
 潤滑用語集 ク
 機械製図の実際 (浜島 潔) 理 工 図 書
 機械要素設計法 (石原 康正) 養 賢 堂
 機械工作法〜手仕上げ作業〜 (西本 進) パ ワ ー 社
 精密測定機器の選び方・使い方 日本規格協会
 精密測定学 (築添 正) 養 賢 堂
 原動機入門2 (近藤 伍一) コ ロ ナ 社
 熱機関通論 新版 (石谷 清幹) ク
 熱機関概論 改著 (熊谷清一郎) 養 賢 堂
 熱機関工学演習 (槌田 昭) 学 献 社
 蒸気工学概論 新版 (勝原 哲治) 山 海 堂
 ボイラ技工教本 新版 共 立 出 版
 内燃機関概論 (竹内 龍三) パ ワ ー 社
 水撃入門 (横山 重吉) 日 新 出 版
 うず巻ポンプの設計 (大町 昌義) パ ワ ー 社
 うず巻ポンプの設計と製図 (寺田 進) 理 工 図 書
 レーシングエンジンの過去・現在・未来
 (中村 良夫) グランプリ出版
 ローターエンジン20年 (大関 博) GP企画センター
 オートバイの歴史 (富塚 清) 山 海 堂
 LIFE IN SPACE 西 武 タ イ ム
 スペースシャトル 教 育 社
 電子通信学会大学シリーズ コ ロ ナ 社
 4: 物質の構造
 電気工学の有限要素法 (中田 高義) 森 北 出 版
 電子・電気工学のための応用数学
 (岡崎伎三男) 槇 書 店
 モータのマイコン制御 (見城 尚志) 総合電子出版社
 大学講義パワーエレクトロニクス (宮入 庄太) 丸 善



電気機器工学 (S. A. ネーサー) マグロウヒル好学社
 半導体・IC用語事典 オ ー ム 社
 集積回路基礎技術 (伊藤 糾次) 昭 晃 堂
 デジタル信号処理と制御 (木村 英紀) ク
 レーザ加工 増補版 (小林 昭) 開 発 社
 レーザ加工(続)増補版 (ク) ク
 マイコン (矢田 光治) 朝 倉
 メッキ技術入門 新增補版 理 工 学 社
 図解放電加工のしくみと100%活用法 技 術 評 論 社
 図解溶接の技術読本 (應和俊雄) 東京電機大学出版局
 化学工学シリーズ 金沢科学技術社
 11: 生物化学工学
 生物反応工学 (山根 恒夫) 産 業 図 書
 新・接着の秘密 (本山 卓彦) ダイアモンド社
 新素材 先端材料のすすめ(上, 下)
 (堂山 昌男) 培 風 館
 科学技術の最前線(II) ダイアモンド社
 設計者のためのCAD/CAM
 (望月 孝) 産 業 図 書
 マイコンロボット製作入門 (定成 信政) マイテック

手作りロボット入門 (片方 善治) 啓学出版
 土の試験実習書 土質工学会
 近代主義を超えて (松葉 一清) 鹿島出版会
 建築基準法の解説 (桜井 喜文) 科学技術社
 建築法規用教材 日本建築学会
 シルバーシリーズ 鹿島出版会

> 7 芸 術 <

岩波美術館
 歴史館 3
 テーマ館 5
 ホログラフィー入門 (村田 和美) 朝倉
 土門拳全集 小学館
 1: 古寺巡礼 (1)
 2: 〃 (2)
 3: 〃 (3)
 4: 〃 (4)
 5: 女人高野室生寺
 エジプトの古代遺跡 (熊瀬川 紀) 〃
 デザイン (日野 永一) 朝倉
 人があそぶ (浜野 安宏) 講談社
 講座アニメーション 美術出版社
 4: 動きをつくる

これからの美術館 (長谷川 栄)
 建物はどうに働いているか
 (アレン・エドワード)
 木造建築士受験テキスト (今井 与蔵) 山海堂
 マンションを長持ちさせる100章
 (樹沢 成明) 鹿島出版会

住宅設計のための詳細 (清水 英男) 彰国社
 常識としての英語の諺800 (ライダウト) 北星堂書店
 一級ボイラ技士試験問題解答集
 (中井多喜雄) 燃料及燃料社
 二級ボイラ技士試験問題解答集

(〃) 〃
 熱工学基礎講座 (松永 省吾) 〃
 新編第三種電験問題の研究 オーム社

4: 模擬問題<基礎編>
 電子科学シリーズ

81: マイクロプロセッサシーケンス制御
 (安居院 猛) 産報出版
 Z-80マイコンの作り方 (大川 善邦) 〃
 だれにでもわかる続・マイコンの作り方・使
 い方 (河内 洋二) 啓学出版
 マイコン回路の手ほどき (白土義男) 日本放送出版協会
 作りながら学ぶマイコン設計トレーニング
 (神崎 康宏) CQ出版社

> 8 語 学 <

自家製文章読本 (井上ひさし) 新潮社
 禁じられた英語 (竹村 健一) 南雲堂
 英和辞典にない語源情報 (松野 道男) 〃
 小学館ランダムハウス英和大辞典
 現代実用英文ガイド (北川 大憲) 北星堂書店
 新聞英語の研究 (和田 義隆) 〃

> 6 産 業 <

原色園芸植物大図鑑 北隆館
 地域交通をあるく (大西 隆) 山海堂

> 9 文 学 <

古典を読む 岩波
 11: 大鏡 (永井 路子)
 12: 枕草子 (寺田 透)
 13: 伊勢物語 (杉本 苑子)
 14: 源氏物語 (大野 晋)
 15: 太平記 (永積 安明)
 完訳日本の古典 小学館
 16: 源氏物語 (3)
 24: 和泉式部日記・紫式部日記・更級日
 記
 43: 平家物語 (2)
 53: 万の文反古, 世間胸算用
 松本清張全集1~56 文芸春秋
 志賀直哉全集11~14 岩波
 別巻: 志賀直哉宛書簡
 風俗のパロジ (バルザック) 新評論

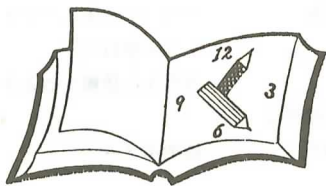


岩波新書

- 261: 第四折々のうた (大岡 信)
 262: 中学教師 (太田 昭臣)
 263: 尾瀬一山小屋三代の記 (後藤 充)
 264: 四谷怪談 (廣末 保)
 265: DNAと遺伝情報 (三浦謙一郎)
 266: ああダンプ街道 (佐久間 充)
 267: 核廃絶は可能か (飯島 宗一)
 268: 俳風動物記 (宮地伝三郎)
 269: インパール作戦従軍記 (丸山 静雄)
 270: 子どもの思考力 (滝沢 武久)
 271: ごみと都市生活 (吉村 功)
 272: イワナの謎を追う (石城 謙吉)
 273: 戦後教育を考える (稲垣 忠彦)
 274: 田中正造 (由井 正臣)
 275: ひとりひとりの戦争・広島
 (北島 宏泰)
 276: 術語集 (中村雄二郎)
 277: 橋と日本人 (上田 篤)
 278: 人間喜劇の老嬢たち (寺田 透)

岩波ジュニア新書

- 75: 中学生の春夏秋冬 (石川 逸子)
 76: 古文の読み方 (藤井 貞和)
 77: 尾瀬ハイキング (蜂谷 緑)
 78: けんかの仕方教えます (佐江 衆一)
 79: ナガサキー1945年8月9日
 80: 高校野球の青春 (神田 順治)
 81: ユーモアの発見 (長 新太)
 82: ホメロス物語 (森 進一)
 83: 気象なんでも百科 (高橋浩一郎)



カラーブックス

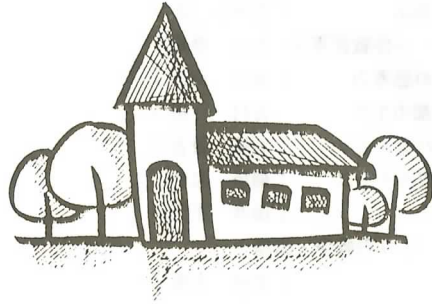
- 640: 日本の市章(西日本) (丹羽 基二)
 641: 江ノ電各駅停車 (澤 寿郎)
 642: 家庭犬 (大野 淳一)
 643: 名古屋味どころ (中島 公司)
 644: 赤ちゃんといっしょ (南部 春生)
 645: 東京下町ぶらり散歩 (山本 鈺太郎)
 646: 仙台味どころ (江草 文子)
 647: 金沢文学散歩 (安宅 夏夫)
 648: 日本の神話 (山田 宗陸)
 649: 信州・飛騨の温泉 (横田 泰一)
 650: 夏・秋の草花花壇 (島田 康治)
 651: 新体操 (加茂 佳子)
 652: 東洋医学入門 (森 一夫)
 653: 東北の温泉めぐり (新沼美津江)
 654: 写真に見る日本の本 (庄司 浅水)



新潮文庫

- ことばの人間学 (鈴木 孝夫)
 夜あけ朝あけ (住井 すゑ)
 橋のない川 (〃)
 向い風 (〃)
 オーディオの楽しみ (瀬川 冬樹)
 夏の終り (瀬戸内晴美)
 女徳 (〃)
 いずこより (〃)
 妻と女の間 (〃)
 遠い声 (〃)
 中世炎上 (〃)
 色徳 (〃)
 妻たち (〃)
 まどう (〃)
 風のたより (〃)

- 愛と死の書 (芹沢光治良)
- 巴里に死す (/)
- 結婚 (/)
- 愛と知と悲しみと (/)
- 人間の運命 (/)
- わが恋の墓標 (曾野 綾子)
- 砂糖菓子が壊れるとき (/)
- たまゆら (/)
- 生命ある限り (/)
- 華やかな手 (/)
- 一条の光 (/)
- 太郎物語 高校編 (/)
- 太郎物語 大学編 (/)
- 木枯しの庭 (/)
- 二十歳の原点 (高野 悦子)
- 二十歳の原点序章 (/)
- 二十歳の原点ノート (/)
- 悲の器 (高橋 和己)



模範六法 昭和59年版	三省堂
国土利用白書 昭和59年版	大蔵省
建設白書 昭和59年版	/
経済白書 /	/
労働白書 /	日本労働協会
現代人のための情報源大百科	講談社

寄贈図書

寄贈者	書名
吉田工業(株)	YKK五十年史
中国地方建設局	管内技術研究会論文集
米子工業高等専門学校	鳥取県中部地震(昭和58年)山陰豪雪(昭和59年)他災害調査報告書
日新工業株式会社	アスファルトルーフィングのルーツを探ねて
弁理士会	弁理士に依頼するときの本
建設省中国地方建設局 山口工事事務所	島地川ダム

